味合いが強いという立場から、これを拒否する考えがあると伺っていた。

つまり、神社関係・仏教関係等のすべてを宗教教育だときめつける考え方が、その底流にあり、例えばお祭りの御輿（みこし）についてさえ、同様にみることが戦後の学校教育の中に流れていた時期をふり返りながら、今回の地御前地区の人々の取り組みに対して、その経緯に私は強い関心を抱いた。

なぜ、今年は児童達に、流鏑馬等の行事を拝観・見学させようという、郷土文化に触れるような、積極的な方向づけができたのか。

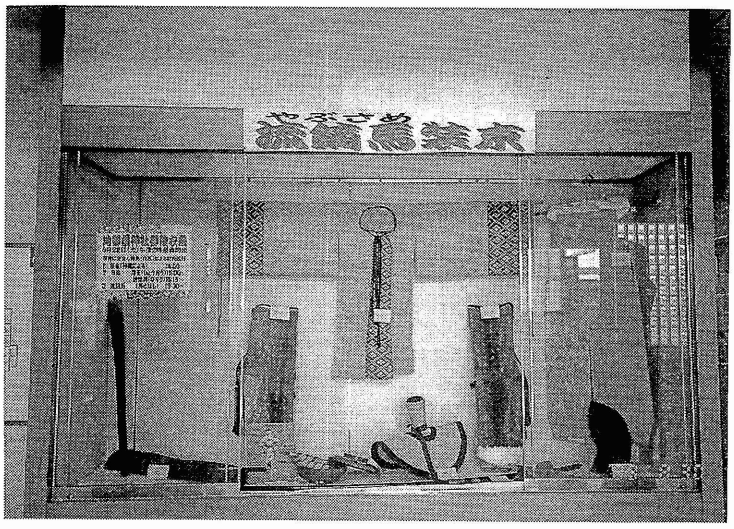
ひと言でいえば「機が熟していた」ということではあるが、地元の郷土文化保存会が、その代表者である磯部忠利さんを中心として、流鏑馬の行事に永年取り組んで来られたことが、その土台になっていることはいうまでもない。

さらに、地御前公民館長、星野昭治さんの話によると、「流鏑馬を伝統文化として継承して行こうとする動きが大きく加わり、『まちづくり委員会』の重冨欣治さん達が、流鏑馬行事を『地域のまつり』として取り上げようと発案され、先ず装束・小道具を新調されたのが大きい」とのこと。

私も、御陵衣祭の前に、その装束・小道具類を地御前公民館に展示してあるのを、拝見させていただいたが、その費用は、『まちづくり委員会』から出費されたと伺っている。

廿日市市では、十一の小学校区があり、十一の公民館があることは周知のことだが、各地域毎にまちづくりを推進していくために、補助金が交付された。地御前地区はその補助金を今回の諸経費に当てて、地御前地区の『まちづくりパワー』という発案であった。

『まちづくり委員会』の代表の方々は、五月の地区運動会で『流鏑馬』装束を披露されて、地域住民への興味・関心を促したり、小学校との折衝を密になる等、熱意ある働きかけをされている。



流鏑馬装束の展示

さらに、『流鏑馬』行事を伝統文化として捉え、総合学習の中で学ばせるという合同企画［地域委員会との］は、学校としても、まさに画期的なことであり、氷川静優校長の決断も大変だったであろうと推察している。

私は、後日、平松和枝教頭にお目にかかり、その時の取り組みについて伺うことができた。

「校長先生と一緒に、その内容を検討し、職員の賛同を得て、今回のような取り上げ方をしました。」とのことであった。

当日の流鏑馬姿をデジタルカメラで写した作品は、写真コンテストとして、学校および公民館で展示され、人目をひいていた。

児童にとっては『流鏑馬』の勇壮な姿を目の前に見て、しかも、数人に一台ずつのカメラによって、それを写すという行為は初めてのことであり、強いインパクトを受けたに違いない。（三年生以上の約二百七十名の参加）

いずれにしても、御陵衣祭に関わる内容であり、地御前神社、飯田元隆宮司さん等神社関係者の方々、郷土文化保存会・町づくり委員会・公民館・学校関係者が一体となり、心をひとつに取り組んだその経緯を私は知り、そのご努力に対して、頭のさがる思いである。

四、『流鏑馬神事』の変遷

御陵衣祭当日、午前中に今市稲荷社まで、白馬をひいて通って行かれる様子をご覧になった方は、何人ぐらいおられるだろうか。

今市稲荷が建立されたのは、江戸時代の安永二年（一七七三）と伝えられている。ここは、大歳神社の神輿渡御（みこしとぎょ）の御旅所（おたびしょ）であったといわれる。

今年の白馬は、山口県から連れて来られたと聞いているが、榊の枝を前に付け、旧道を進むのは、まつりの前に道を浄めるという意味があるとのことである。

往古の【流鏑馬神事】に、使われた装束・小道具類が、今でも大歳神社に保管されているという。